The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国近代美学の出発点 ： 「境界」の概念
Author(s)	楊, 冰
Citation	中国研究集刊. 2015, 60, p. 142-159
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58645
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 称号（総六十号記念号）平成二十七年六月 一四二―一五九頁

中国近代美学の出発点

―「境界」の概念―

楊 冰

初めに

王国維（一八七七～一九二七）が一九〇二年から一九〇八年まで行っていた哲学研究は、中国近代における哲学の学問としての成立の基礎を定めたものであった。特に、一九〇八年に発表した詩論『人間詞話』(注1)における「境界」の概念は、今日の中国美学の核心的な概念「意境」の原点であり、今日でも研究界に注目されている。日本では、王国維の哲学美学理論の研究は行われていないが(注2)、一方中国では、王国維の美学思想に関する研究は盛んに行われてきた。

筆者の今までの研究では、先行研究における二つの「見落とし」を指摘してきた。簡潔に言えば、一つは『人間詞話』とそれが執筆されるまでの王国維の哲学思想の関連性（葉嘉瑩『王国維及其文学批評』、一九八〇、佛雛『王国維詩学研究』、一九九九）で、もう一つは、王国維が哲学研究を志した時、意欲的に学習した日本明治期の学者達の哲学心理学思想などが王国維の思想に与えた影響（羅鋼「王国維和泡尔生」、『清華大学学報』、二〇一一年）である。その二つの見落としを補おうという形で行われてきた筆者の研究は、『人間詞話』が執筆されるまでの王国維の哲学思想の形成（一九〇三～一九〇七）に着眼し、明治期の日本の哲学者、桑木厳翼の思想が王国維の哲学思想の形成に与えた影響を中心に論じてきた。その研究によって、桑木厳翼の『哲学概論』

（東京専門学校出版部、一九〇〇）が王国維の最初に触れた西洋哲学の理論書であり、王国維のカント哲学思想に対する理解に影響を与えたことを明らかにした。

今までの研究の延長線にある本研究は、よりミクロの視点からカント哲学の「認識論」に着目し、引き続き王国維の思想と桑木厳翼の関係を探る。それと同時に、より広い視野で、桑木厳翼のみならず、明治期の日本のカント哲学研究全体（哲学と心理学の両面において）と王国維のカント哲学受容の関係を分析する。それらのことを明らかにすることによって、彼の哲学思想の蓄積の上で築かれた美学理論『人間詩話』の「境界」の概念における、カント哲学の要素を抽出し、「境界」という概念の含蓄を明らかにしたい。

第一章　王国維の「独学」と明治期の日本の哲学心理学研究

王国維が三十歳に書いた自伝には、彼の哲学理論研究をする後代の研究者たちにとって、重要なヒントとなる記録が残されている。彼は、西洋哲学の独学時代に学習した西洋の哲学や心理学などの思想書、とりわけドイツの学者の著作を中心に幾つか挙げている。勿論それらの著作は、当時、まだ中国語翻訳されていなかった。王国維が読んだのは、ドイツ語の原文なのか、それとも英語に訳された英語版のものなのか、それについて王国維の説明はなかった。それに対して、同じく哲学を独学した時期に彼が執筆した文章の中に引用されたドイツの哲学書の部分について、「英語版」の引用だと王国維自身によって説明されている。この点を受け、今までの多くの先行研究は、王国維が西洋哲学を独学した時期に読んだ西洋の哲学書（王国維の西洋哲学の独学に用いられたテキストに当たるもの）の全てが、ドイツ語原作の英訳版だと「推定」している。さらに、その「推定」に基づき、それらの英語版の内容と王国維自身の哲学美学の論文との比較分析を行い、それらの著作の思想が王国維の哲学美学思想に与えた影響が論じられてきた。

王国維が西洋哲学の独学に用いたテキストは、果たして本当に英訳版なのだろうか。その問いかけは、今までの先行研究には存在しなかった。そのため先行研究における「推定」に基づく、王国維の思想形成における重要な事柄について、その真偽を検証する必要がある。第一章の主な目的は、王国維の西洋哲学の独学に用いられたテキストは、本当に英訳版なのか、具体的に検証することによって、明らかにすることである。

それを明らかにする前に、当時中国語に翻訳されてい

なかった西洋哲学書の独学を可能にさせた、外国語文献の精読に必要となる王国維の外国語力（主に英語力、日本語力）はどのレベルに達していたかを検証する必要がある。先行研究に触れておけば、王国維の自伝の記述に基づき、王国維が「日本語と英語の両方を習得していた」と見なされている(注3)が、その習得の達成度について触れていなかった。つまり、王国維の外国語力については、未だに明らかにされていないのである。第一章では、まず王国維の自伝（「自序」、一九〇七）(注4)や、彼に関する記録が多く見られる彼の父の日記（「王乃誉日記」手稿）(注5)、及び彼の学術研究に大きな影響を与えた羅振玉の孫娘の書籍（羅琨『羅振玉玉評伝』百花洲文芸出版社、二〇一〇）などを参考に、王国維が西洋哲学の独学を可能にさせた外国語力がいかに養われ、どれほどのレベルに達したかを具体的に分析する。さらに、王国維の留学、専門書翻訳の過程を整理し、彼がどのように西洋哲学思想に出会い、吸収したかを明らかにする。

第一節　「東文学社」での勉学
―学術理論書の翻訳者としての出発点

一八九八年、二十一才の王国維は、故郷の海寧(注6)から上海にやってきて雑誌社「時務報」(注7)に入社し、書記として働き始める。王国維が初めて西洋や日本の近代の思想に触れたのは、この「時務報」においてである(注8)。だが、そこでは外国語を学ぶチャンスがなかった。王国維が正式的に外国語を学んだのは、「時務報」に入社した同年に入学した、「東文学社」である。

東文学社は、中国国内で初めて設立された日本語学校であった。王国維は、ここで彼の学術生涯に重要な影響を与え続けた東文学社の設立者である羅振玉に出会った。羅振玉は、やがて王国維と日本との架け橋的な人物となる。当時、羅振玉は、近代化に立ち遅れた中国の見習うべきモデルは、西洋ではなく同じアジアの日本だと判断し、明治維新以降の日本の農業及び学校教育の在り方をいち早く中国に導入しようとしていた。それを実現するには、日本語の専門書や専門誌などを中国語へ翻訳することが必要となる。羅振玉の東文学社を設立した目的は、日本語の学術理論書を翻訳できる人材を育成する点にあった(注9)。つまり、東文学社は、日本語専門書の正確な翻訳ができる、高度な語学力の持つ人材を育成する日本語学校であった。その日本語の学習は、最初の段階から日常的な日本語の会話力ではなく、学術的な日本語文章の読解力に対する訓練が重ねられていた(注10)。王国維は、一九〇〇年に東文学社が解散されるまでの二年

半の間、日本人教師の元で日本語を習っていた(注11)。

東文学社における王国維の日本語の上達ぶりは著しいものであった。彼は、日本語を習い始めて三ヶ月後（一八八九年五月）に、当時「東報」と呼ばれている日本の新聞の翻訳を任せられた(注12)。十ヶ月後（同年十二月）に、「隷報」という中国の新聞を日本語へ翻訳する仕事を任せられた(注13)。王国維の日本語力が、周囲に認められたからこそ、次から次へと翻訳の仕事を任せられたのであろう。しかし、羅振玉の孫娘であり、歴史学者の羅琨の書籍（『羅振玉評伝』、三一頁）によれば、王国維は東文学社の月末試験に合格できず除名されそうになった時もあった。その時、羅振玉は彼の努力を認め、除名しなかったという。彼の落第した月末試験は、上達の著しかった日本語ではなかったはずである。王国維の自伝によれば、東文学社は数学、物理、化学、英文の講義も開設されたという。また、羅琨の書籍によれば、東文学社は初期では日本語のみ開講されたが、その後、「農業専門書の内容は屡々物理、化学、数学、英語の知識と関連する」ため、その後、物理、化学、数学、英語の講義も開設された。ただ、それらの科目は専門の教師ではなく、日本語を教える日本人の講師によって日本語で教えられていたという。王国維の落ちた科目は日本語以外の物理、化学、数学、英語に関わるものであろう。つまり、日本語以外、王国維は優秀な成績を収められなかったのである。以上で見てきたように、英語も含め、日本語以外の科目は、日本語のように本格的な学習ではなく、あくまで科学専門書などを翻訳する際に必要な基礎知識を得るために習っていた。また、東文学社に在学中に、王国維が行った日本語翻訳の記録はしばしば見られるが、一方、英語の翻訳の記録はまったく見当たらない。

第二節　「東京物理学校」への留学―理系進学の挫折

東文学社に入って翌年の六月、王国維は羅振玉の推薦を受け、日本への留学が計画されていた。生涯文系の理論研究を貫いた王国維が、学問に志した留学の時に選んだ学問は、文系ではなく、理系であった。一九〇〇年の年末、王国維は初めて日本に渡り、当時、名前の知られている(注14)専門学校「東京物理学校」に入学する。

東京物理学校の前身は、一八八一年（明治十四年）九月に寺尾寿など東京大学物理学部物理学科の初期の卒業生達により、「理学の普及」という目的で設立された私塾「東京物理学講習所」であって、一八八三年に「東京物理学校」に改称されていた。自伝によれば、王国維は

昼間は英文、夜は東京物理学校で数学を習っていたという(注15)。王国維の入学した一九〇〇年時点では、東京物理学校は三年六学期制の夜間学校で、初年度の第一学期は代数学、算術学、幾何学の科目を履修し、二学期から初めて物理学などを履修することになっていた(注16)。「夜は東京物理学校で数学を習っていた」ということからみれば、王国維は第一学期に在学していたことが分かる。

自伝によれば、王国維は一八九一年の四、五月に病に倒れたため、中国に帰国した。だが、実際留学をやめた理由はより複雑であったように思われる。『東京物理学校五十年小史』によれば、東京物理学校の入試は、第一学期に入るための試験は設けられていないが、第二学期以上に進学する進学試験は設けられている。その試験は、毎年の二月中旬、四月中旬、九月下旬、十月下旬に実施されていた。また、試験を二回落第した生徒に対して、退学させるという規則もあった(注17)。前文で触れたように、「東文学社」では王国維は数学が含まれる理系の科目の月末試験は不合格であったこともあった。第一学期在学中の王国維は病弱な体であり、また東文学社時代でも不得意であった数学の勉強は上手くいかず、二月と四月に実施された第二学期の進学試験に落第し、退学を余儀なくされた可能性も考えられる。

だが、東京物理学校での留学は王国維にとって不運な事ばかりではなかった。そこで、王国維は重要な出会いがあった。『東京物理学校五十年小史』の各年度の採用された教師名簿記録によれば、ちょうど王国維の在学中の一九〇一年に、東京大学の物理学科卒の桑木彧雄が教員として採用されたことが分かる。桑木彧雄の兄は、当時反響を呼んだ哲学書を出版した哲学者の桑木厳翼である。桑木彧雄自身も物理学者でありながら、兄の専門である哲学に関心を持っていた。一九〇七年、彼が明治専門学校の教壇に立った時、よく学生たちに「物理学上の認識論」の話をされ、物理実験室の書架にはデカルトの哲学書などがまじっていたと、教え子によって回想されている(注18)。彼の著作の中に、『物理学と認識』(一九二二年)という著作もある。王国維は東京物理学校で桑木彧雄を通じて、彼の兄の桑木厳翼の哲学研究及びその著書を知った可能性が十分考えられる。物理学の進学の扉が閉ざされたことで、哲学への道に転向するという意志が王国維の中で固まったのであろう。

王国維は、留学で実現できなかったことを「独学」で補おうとしていた。自伝では、病で留学を断念し帰国した後、哲学の「独学」の時代が始まったと述べている(注19)。独学するには当然教材が必要である。帰国後の

王国維は、羅振玉の創刊した雑誌社『教育世界』(注20)の編集者兼翻訳者として働き出した。明治の学術理論書の翻訳は、彼にとって仕事（『教育世界』の投稿の提供）と独学（翻訳を通じて原作の精読）を両立させる一石二鳥の方法であったのであろう。日本から帰国した直後、王国維は立花銑三郎の『教育学』を翻訳し、『教育世界』の八月、九月号に発表した。翌年の一九〇二年、彼は元良勇次郎の『心理学』、『倫理学』、桑木厳翼の『哲学概論』を翻訳し、その年に『教育世界』に発表した。

王国維の父親の一九〇二年六月十九日の日記(注21)によれば、王国維は日本の学者の「思惟の細やかさ、論証の厳密さ」（心思之細、推勘甚微）に感心したと書かれている。その記録では、王国維の明治期日本の学術研究に対する傾倒ぶりが窺える。王国維が独学した時期は、明治の最先端の学術理論書を翻訳した時期と重なっているということから、王国維は、立花銑三郎の『教育学』、元良勇次郎の『心理学』、『倫理学』、桑木厳翼の『哲学概論』の翻訳とともに、原文の内容に対する正確な理解を前提とする翻訳作業を通じて、それらの著作を教材とし、独学をしていたことが分かる。

王国維が独学した際、教材とした著作は、以上の四冊に止まらなかった。筆者の調べによれば、数多くの明治期の思想理論書は、王国維の独学の教材として用いられていた。次の第三節では、第一章の冒頭で触れた、王国維の「自伝」に挙げられた著作について検討する。

第三節　王国維の独学した明治期日本の哲学・心理学理論書

「自伝」（『静庵文集』、一五九頁）において、王国維は独学に用いた教材について次のように挙げている。

> 次歳春、始読翻尓彭之《社会学》、及文之《名学》、海甫定之《心理学》之半。而所購哲学之書亦至于是**暫輟**心理学而読巴尓善之《哲学概**论**》、文特尓彭之《哲学史》。

このように、王国維は一九〇三年の春に、自分の独学した教材を具体的に述べている。傍線は筆者の引いたもので、引かれているのはすべて西洋の哲学者や心理学者などの名前（当て字）である。筆者の調べによれば、ここで王国維の触れているすべての英文の著作は、一九〇三年の時点で、日本国内においてすでに日本語版の訳書が出版されている。以下、具体的に挙げよう。

一、王国維の言う「翻尓彭之」はイギリスの社会学

者、アーサー・フェーアバンクス（Arthur・Fairbanks、一八六四―一九四四）。王国維のいう彼の「社会学」の英文原作のタイトルは *An Introduction to Sociology* であって、一九〇〇年に十時弥によって訳され、「社会学」というタイトルで東京博文館から出版されていた。

二、「及文」はイギリスの経済学者、論理学者、ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ（William Stanley Jevons、一八三五―一八八二）である。王国維のいう彼の「名学」の英文原作は *Elementary Lessons Logic: Deductive and Inductive* であって、一八八三年に「論理新編」というタイトルで添田寿一訳、井上哲次郎校閲によって学部図書館編訳局から出版されていた。

三、「海甫定」はデンマークの心理学者、ハラルド・ヘフデング（Harald Hoffding、一八四三―一九三一）である。石田新太郎が一八九七年に彼の『心理学概論』を訳し、高等学術研究会から出版されていた。

四、「巴尔善」はドイツの哲学者、パウルゼン（Paulsen Friedrich、一八四六―一八〇八）で彼の *Einleitung in die Philosophie* は一九〇二年に朝永三十郎によって翻訳され、「哲学綱要」というタイトルで宝文館から出版されていた。

五、「文特尔彭之」はドイツの哲学者、ヴィンデルバンド。一九〇二年に桑木厳翼は彼の『哲学史要』を訳し、早稲田大学出版部から出版されていた。

第一節と第二節で見てきたように、王国維は東文学社で日本語を本格的に学習し、学術書の正確な翻訳ができるほどの日本語の読解力を備えていた。その一方、彼の英語の学習は入門程度に留まり、英語の翻訳を発表したこともなかった。つまり、彼の日本語力は英語力より遙かに高かった。彼の独学時代の教科書は、今までの研究で指摘されたような英文の著作ではなく、それらの英文に基づき、日本の学者の解釈が加えられた、明治期の和文の著作である。

王国維と西洋の間には、明治期の日本というフィルタが介在しており、彼は明治期の日本の哲学及び心理学の学術書を通じて西洋の哲学や心理学を学習した。さらに、筆者は王国維の一九〇〇年から一九〇七年までの訳書を調べた結果、今までそれらの訳書の原作は英語の著作だとされてきたが、その本当の原作は、明治期の日本語の学術著書である可能性が極めて高いということも判明した(注22)。その中に桑木厳翼の著作（『ミュイアーヘッド氏倫理学』、富山房、一八九七年）もある。

この時期に王国維の未署名の訳文(注23)も存在するとすでに指摘されている。その中には、桑木厳翼の著作（『哲

学史要』）も含まれている。それらの著作も計算に入れると、一九〇一年から一九〇八年まで、王国維が精読した明治期の日本の思想書の数は、二十冊以上にも及ぶ。王国維は、精読ができるほどの日本語力を頼りに、日本の明治時代を代表する哲学者や心理学者、教育学者などの理論書を、翻訳する作業を通じて一通り精読した。

その中で、彼が多くの著作を読んだのは、かつて東京物理学校で師事していた桑木彧雄の兄、カント哲学の研究者の桑木厳翼の著作である（『哲学概論』（一九〇〇）、『哲学史要』（一九〇二）、『ニーチェ氏倫理説一斑』（一九〇〇）、「荀子の論理説」（一九〇〇）、『ミュイアーヘッド氏倫理学』（一八九七）。）第二章では、筆者の今まで行なってきた研究を踏まえながら、桑木厳翼の哲学理論と王国維の哲学理論の関係性を探る。

第二章　王国維の哲学理論の形成と明治期日本のカント哲学の受容

筆者の今までの研究では、一九〇二年に王国維の翻訳した桑木厳翼の『哲学概論』と、それを翻訳した翌年に王国維自身の執筆した「哲学辨惑」の比較研究を通じて、王国維の哲学美学思想における桑木厳翼の重要な影響を明らかにした。それは、王国維の哲学美学研究全体における一つの大きなテーマ「正名論」である(注24)。「正名論」を具体的に言うと、西洋の哲学理論との比較によって「中国固有」(注25)の哲学思想の中から重要な概念を抽出し、その概念を明確に規定することで「中国固有」の哲学美学思想を理論化する、というものである。「哲学辨惑」が発表された翌年の一九〇四年に書かれた「釋理」と「論性」、及び一九〇五年に執筆された「原命」は、すべて明確に定義されていない中国の儒学思想の「理」、「性」、「命」などの概念を、それらの概念に通じる西洋哲学の概念との比較によって、明確に定義しようとする論文である。

『人間詞話』が発表される一年前の一九〇七年に執筆された「古雅之在美学上之位置」においても、「古雅」という、王国維の独自の美学概念を定義するということを目的としている。さらに、一九〇八年の『人間詞話』に掲げる最も重要な目的もまた「境界」という、王国維の独自の美学概念に定義を与えることである。「古雅」と「境界」などの美学の概念は、王国維の定義した「性」、「理」、「命」などの哲学の概念の延長線にあるものであって、西洋の美学思想の概念との比較によって、中国の固有の美学思想の概念を捉え直したものである可能性が十分に考えられる。従って、第二章において、こ

の王国維の哲学理論の出発点としての「正名論」から、その到達点となる「認識論」まで、彼の哲学理論の全体を分析する。その分析は、王国維の理論に大きな影響を与えた、明治期日本の哲学者桑木厳翼と心理学者元良勇次郎の理論との関係性に立脚して行う。

第一節　「正名論」から出発し「認識（観念）論」へ到達する王国維の哲学理論

今までの筆者の研究では、王国維が一九〇四年に翻訳した桑木厳翼（以下「桑木」と略す）の『哲学概論』の付録に収録されている「荀子の論理説」と、一九〇五年に王国維自身が執筆した「周秦諸氏之名学」の比較研究を通じて、王国維は桑木の理論を根拠に、荀子の正名篇の論理学的な価値を見出すと同時に、カントの「認識論」の角度から荀子の「耳目鼻口体」と「心」の関係を中心とする「天官論」を理論化しようとしたことを明らかにした(注26)。一九〇五年に「周秦諸子之名学」を執筆した王国維の関心の元は、カントの「認識論」にあったのであろう。

「認識論」に対する関心は、同じく一九〇五年の『教育世界』に発表された「論新学語之輸入」から読み取ることもできる。この文章において「直観（Intuition）」と「観念（Idea）」という二つの概念に対する王国維の理解が述べられ、王国維の哲学思想を理解するための大きな糸口となる。彼の理解している「直観」という概念は「耳、鼻、眼、口、体という五官の作用に心の作用が加えたもの」で、まさしく桑木の解釈した荀子の「天官」の理論である。また、観念は「直観した対象」で、「その物が去り、その像のみ心に留まる」。つまり、観念は心の中の像である。それでは、王国維はなぜ「直観」、「観念」などの概念、及びそれらの概念によって構築された「認識論」に関心を持ったのだろうか。それは、明治期日本の哲学心理学界におけるカントの「認識論」に対する盛んな受容及び研究と関係しているからである。桑木の『哲学概論』と同年（一九〇二年）に、王国維は心理学者元良勇次郎（以下「元良」と略す）の『心理学』、『倫理学』も翻訳していた。前文で触れた「周秦諸子之名学」の荀子の正名論の分析において、王国維は桑木の哲学の認識論だけではなく、元良の心理学的観点から見た認識論も用いていた。王国維は、目鼻耳手体を「外官」、心を「内官」と名付けている。その外官と内官の概念は、元良の『心理学』と『倫理学』の両方において触れている(注27)。

『心理学』において、元良は心を「意識的現象」とし

て捉え、意識の中に存在する「観念」の性質及びその活動の法則を中心に説明している。観念を中心に心を捉えている点は、カントに由来している。また、心理学の目的について「観念ノ性質、起源、活動スル法則」を研究することだと述べている(注28)。さらに、観念の性質についての説明は、カントの観念論とも繋がりを持っている。元良は「心物相関論」について「此説ノ意最モ深シ、著者ハ此説ヲ取ルモノナリ」と紹介し、「心物相関論」は「精神モ見様ニヨリテハ客観的トナリ、又外物モ見様ニヨリテハ主観的トナルモノナリ」、「精神ナクシテ獨リ物質存在スルコト能ハズ、又物質ナクシテ獨リ精神存在スル能ハズ」(注29)と説明する。その後、例として大江千里の歌を挙げる。「月みれば　ちぢに者こそ　悲しけれ　わが身一つの秋にはあらねど」(『古今集』)。月は悲しみを引き起こす理がなく、月を主観的に見て心中の悲しみを月に帰したと、この歌を分析する。実は、この大江千里の歌について、王国維は翻訳する時に削除している。大江の歌に当たる箇所は、逆に原作にない白居易の七言の長編詩「長恨歌」の二句を例として挙げている。つまり、王国維が意図的に大江千里の歌を削除し、白居易の詩に変えたのである。その二句は以下の通りである。

離宮見月傷心色，夜雨聞鈴腸斷聲。
(行宮(あんぐう)に月を見れば心を痛ましむるの色、夜雨(やう)に鈴を聞けば腸(はらわた)を断つの聲。)

月と鈴は悲しみを興す理がなく、ただこれらの者は主観に現われ、遂に心中の悲しみを物に帰した(注30)と、王国維が説明している。この二句は、安史の乱で愛する楊貴妃を失った直後の玄宗の悲しみを表している。行宮の月を見るのも、夜の雨に打たれる鈴の音を聞いているのも詩の主人公となる玄宗である。作者の白居易は玄宗に成り代わって、玄宗の感情を代弁しているため、作者と玄宗は同一とも言える。従って、月も鈴も「外物」ではなく、主人公に成り代わった作者の内面に現れる「像」である。

心理学の角度から見れば、王国維は、元良の用いた『古今集』の和歌を廃棄し、自ら白居易の七言古詩「長恨歌」を選んで、その詩における玄宗と玄宗の眺める月、聞く鈴の関係を通じて、カントの「観念論」に立脚する心理学の「心物相関論」を説明している。逆に、美学(詩論)の角度から見れば、王国維は、カントの「観念論」に立脚する心理学の「心物相関」を用いて、初めて漢詩の分析を行った。前文で述べたように、王国維は

観念を「心の中の像」としている。つまり、月も鈴も作者の「観念」そのものである。

観念が意識の中に如何に生じたかについて、『心理学』の「第三章　意識の性質」で論じられている。「意識の相対的性質」の分析において、「一ツノ觀念意識中ニ在リテ精神ノ苦痛ヲ覺ユル時ハ他ノ觀念入リ來リテ快樂ヲ興ヘントスルヲ妨グルハ」(注31)と説明し、ある小説の描写を例として挙げる。「谷間の百合姫」(巻一、九頁)(注32)でも、王国維は同様に原作にある小説を訳さずに、杜甫の五言律詩「春望」の二句を例として挙げた。

感時花濺涙、恨別鳥驚心。
(時に感じては花にも涙を濺ぎ、別れを恨みては鳥にも心を驚かす。)

可憐な姿を持つ花と鳥は、中国では一般的に愉快な情緒を引き起こしてくれる対象とされている。花と鳥が画題となる「花鳥画」という伝統的な絵画のジャンルも存在している。だが、国が滅びた杜甫の悲しみに満ちた心には、花と鳥さえも悲しく映っている。ここは、花も鳥もまた月と鈴と同じく、作者の「観念」だと、王国維が理解している。

この元良の『心理学』の訳書において、王国維の選んだ杜甫の「春望」の二句は、王国維の美学理論の集大成と言われている詩論「人間詞話」の重要な論点「有我の境」(第三則)が説明されている時に用いられた詩の例と共通している。「春望」の二句と同じく『人間詞話』に引用された詩も「花」と「鳥」を用いて悲しみを表現している。次の第二節で、『人間詞話』の「境界」、「有我の境」、「無我の境」と王国維の理解している「観念」の関係を分析する。

第二節　『人間詞話』の「境界」

二―一　「有我之境」

王国維の『人間詞話』は、「詞」(注33)の作品や作家を例にしながら、「詞」の理論を語るもので、一九〇八年から一九〇九年に『国粋學報』に掲載された全六十四則によって構成されている。その中の第一則から第九則までは、詞の評価基準である「境界」という概念を中心に語るもので、全篇において最も重要な部分だとされている(注34)。「人間詞話」の冒頭の第一則には、

詞は境界を最上とする。境界が有れば自ずから高い風格を形成、自ずから名句が生まれる。五代、北

宋の詞が独絶である所以は此れにある(注35)。

と述べられている。ここで掲げられた王国維の「境界」の概念は、『人間詞話』の中心的な概念で、「境界」の有無で詞の優劣を判断することができる。「境界」について数多くの先行研究が行われてきたが(注36)、前文で触れたように、両者とも「人間詞話」にたどり着くまでの王国維の哲学思想の特徴を見逃している。彼の哲学理論の根底にあるのは「正名論」であって、西洋の哲学の概念との比較によって、中国の哲学思想における曖昧でありながら重要な概念を明確に定義する理論である。従って、美学理論としての『人間詞話』もその哲学理論の延長線にあるにちがいない。さらに、元良勇次郎の『心理学』の訳書の分析で分かったように、王国維は大胆にも原作にある例を削除し、漢詩の例を上げ、詩に登場する自然物を「作者の心の像」、つまり彼の理解している「観念」としている。それでは、「境界」と「観念」はどういう関係を持つのだろうか。まず「有我の境」と「観念」の関係を見よう。

再び「人間詞話」に立ち戻って第三則を見よう。

境には有我の境があり、無我の境がある。「涙眼にて花に問へど花はかたらず、乱紅飛び過ぎて秋千に去る」、「可ぞ堪へん孤館春寒に閉ざされ、杜鵑の聲裏に斜陽暮るるに」というのは有我の境である(注37)。

挙げられた二首の詞のうち、前者は北宋の政治家・文学者歐陽修の作品「蝶恋花」である。詞全体は、花柳の巷にふけって家に帰ってこない夫を待つ妻が、晩春の夕暮れに庭の深い木の陰に取り残された寂しさを表すものである。「涙目で花に問いかけても花は語ろうとしない、散りゆく花びらがブランコのほうへ飛んでいく。」ここは杜甫の「春望」「時に感じては花にも涙を濺ぎ」と同じく「涙」と「花」が用いられている。花は悲しい姿として描かれる。後者の「可ぞ堪へん孤館春寒に閉ざされ、杜鵑の聲裏に斜陽暮るるに」は、北宋の詞人秦観の作品「踏莎行」である。ひっそりとした建物に、早春の寒さの中に閉ざしている人は夕暮れの中に聞こえてきたホトトギスの声も悲しみを帯びている。ここで鳥が悲しさを表しているのは、杜甫の「別れを恨みては鳥にも心を驚かす」と同じである。

この二つの作品において、花と鳥は「経験的な外物」ではなく、作者の心に写っている「像」である。前文で

見てきたように、花と鳥は、王国維の理解している作者の「観念」である。王国維のいう「有我の境」は、彼の理解している西洋哲学の「観念」の概念である。

それでは、その対比である「無我之境」はどうだろうか。

二―二「無我之境」

「無我之境」について、王国維は「有我之境」に続き、次のように述べる。

> 「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る」、「寒波潺潺と起こり、白鳥悠悠と下る」というのは無我の境である(注38)。

「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る」(陶淵明「飲酒」)、「寒波潺潺と起こり、白鳥悠悠と下る」(元好問「潁亭留別」)というのは、花と鳥と同じく、菊、山、波、鳥などの自然物が詞の対象となっている。「有我之境」と異なるのは、「無我の境」が作者の見たままの自然物、つまり、感情が混入されていない視覚のみで捉えている自然物である。無我と有我之境のそれぞれの特徴について、王国維は次のように説明する。

> 有我の境では我を以て物を観る、故に物にはすべて我の色彩が著す。無我の境では物を以て物を観る。故に何が我なのか、何が物なのか知らず。古人の詞には有我の境を描いたものが多し、無我の境を写けないというわけではない。豪傑の士はおのずおから樹立することができる(注39)。

ここで王国維の用いた「観る」という字は、前文で触れたように、「観念」と共に、その定義を確かめた「直観」のことと理解することができる。前文で触れたように、王国維の理解している直観は「耳、鼻、眼、口、体という五官の作用に心の作用が加えたもの」である。「我を以て物を観る」という有我の境は、自然物を見る時、五官という感覚器官が働く以外に、我(心、感情)も働く。それに対して、「物を以て物を観る」という無我の境は、自然物を見る時、感覚器官のみ働き、我(心、感情)が働かない。有我の境は、観念であるのに対して、無我の境は直覚に近いと言えよう。

『人間詞話』の第四則では、「無我之境は人が惟静の中に得られ、有我之境は動の静になる時に得られる。そのため一つは優美で、一つは宏壮である(注40)。」と書かれている。無我の境を得られる「静」というのは、感情の

働きのない状態であろう。それでは、有我の境を得られる「動の静になる時」とはどういう状況だろうか。この「動から静へという変化」は、王国維の理解しているカントの理性本能の段階の変化と関係している。

前文で触れたように、王国維は桑木厳翼の『哲学史要』も独学の教材として精読した。『哲学史要』において、カントの理性能力の本質が詳細に説明されている。

> 謂へらく理論的理性の総合は三段より成る、第一感覺を結合して直觀となすとは時空の形式により、第二直觀を結合して自然的實在の經驗となすは悟性概念により、第三經驗的判斷を結合して形而上學的認識となすは理念と名づくる普遍原理による。

第一段階では、時空の形式によって、感覚を結合して直観となす。それは直覚にちかい、「無我の境」の実質である。さらに、悟性概念によって直観を結合して自然的実在の経験となすのは、第二の段階で、観念とされている「有我の境」の実質である。

このカントの理性能力の本質は、明治期の心理学研究にも用いられている。一九〇一年に王国維の翻訳した立花銑三郎の『教育学』(注41)において、立花は「境界」という概念を用いて、カントの理性能力の三段階の説明をする(注42)。まず、第一の段階は「直覚」という。直覚とは「吾人の精神が外界の作用を受くる第一の境界」である。さらに、第二の段階は「内容の何たるやを明に認むるに至る是れ即ち意識の境界なり。之の働を名けて観念(アイデア)と云ふ。」である(注43)。

立花の心理学の観点からカントの理性能力の三段階の説明は、桑木厳翼の哲学の観点からの説明より分かりやすいが、基本は同じである。『人間詞話』の無我の境とは、カントの理性能力の本質における、第一の「直覚」の段階で、有我の境は第二の「観念」の段階であると考えられる。

終わりに

第一章では、王国維が哲学を独学する時期に、明治期日本の哲学心理学学術書をテキストとして学習したことを明らかにした。彼の西洋哲学思想の吸収は、日本明治期の思想というフィルタを経由している。そのフィルタにおける重要な人物は桑木厳翼であり、重要な理論はカントの認識論である。第二章では、比較分析を通じて王国維の特に関心を持つ理論は、カントの認識論であるこ

とを明らかにし、さらに、明治期日本の哲学心理学思想における、カントの認識論の受容と、王国維の哲学理論における「直観」と「観念」の概念の比較によって、彼の美学理論の集大成である『人間詞話』の「無我の境」、「有我の境」という概念における西洋哲学の要素を明らかにした。すでに述べたが、「無我の境」とは、カントの理性能力の本質における第一の「直覚」の段階で、「有我の境」は第二の「観念」の段階である。「無我の境」も「有我の境」も、人間の認識にかかわる理性能力に関わるものであるため、王国維のいう「境界」は、カントの「理性」に近い概念のように思われる。

だが、「有我の境」と「無我の境」という二つの概念は、完全にカントの認識論に由来するものだろうか。そうではないように見える。一九〇六年に書かれた「文学小言」では、王国維は中国の文学に二つの原質「景」と「情」があると述べている。この両概念は、中国の詩論における固有の概念であって、『人間詞話』の「無我の境」と「有我の境」の概念に近い。王国維は、カントの認識論における理性能力によって、中国の詩論の固有の概念を定義しようとしていたのであろう。それは、まさに彼の哲学理論の出発点であって根底でもある「正名論」である。今後、『人間詞話』において王国維に取り上げられた、宋代の詩論『滄波詩話』を視野に入れ、「境界」の概念における中国固有の美学思想的要素を明らかにしたい。

注

（1）『人間詞話』は、全六十四則によって構成された詩論である。はじめは、一九〇八年十月から一九〇九年一月までに出版された雑誌『国粋学報』の四十七号、四十九号、五十号において発表された。その後の一九二六年に、樸社によって単行本として出版された。

（2）日本国内では、王国維研究について、考古学（高田時雄編『草創期の敦煌学：羅・王国維両先生東渡九十周年記念日中共同ワークショップの記録』、知泉書館、二〇〇二。）や近代史的な研究（銭鷗「学・智・人的理念―試論王国維與晩清興学育才的思想契機」、『言語文化』十二、同志社大学言語文化学会、二〇〇九。須川照一「「上海時代」の藤田剣峯・王国維雑記」、『東方学』、一般財団法人東方学会、一九八三。銭鷗「青年時代の王国維と明治学術文化―『教育世界』をめぐって」、富士ゼロックス小林節太郎記念基金編集、一九九七。）が中心となる中、境界の理論に注目する研究もあるが、「文学論」の角度から論じるもの（竹村則行「王国維の境界説と田岡嶺雲の境

界説」、『中国文学論集』、九州大学中国文化会、一九八六。井波陵一『紅楼夢と王国維　二つの星をめぐって』、朋友書、二〇〇八。「「美」を問題にすること―王国維の美学・文学論をめぐって」「文学・映像における「分身」テーマの総合的研究」平成十八年度～平成二十年度科学研究費補助金・基盤研究（B）研究成果報告書、二〇〇九年。）のみで、彼の「哲学思想」や「美学理論」の研究が行われていない。

（3）王国維「自序」、『静庵文集』、遼寧教育出版社、一九九七年、一五九頁。「又一年，而値庚子之変。学社解散。蓋余之学于東文学社也，二年有半。而其学英文亦一年有半。」訳：また一年後、時まさに「庚子之変」に当たり、学社は解散した。僕が東文学社で勉強したのはおおかた二年半であった。英文の勉強も一年半であった。

（4）『静庵文集續編』、『王国維遺書』第五冊、上海古籍書店、一九八三年。

（5）上海図書館所蔵。

（6）浙江省の北にある町。

（7）一八九六年八月九日に黄遵憲と汪康年が創刊した「時務報」は、中国人によって設立された中国史上の 最初の雑誌社である。主編は梁啓超で、十日ごとに発行される旬刊で一回は三十頁前後である。

（8）「時務報」は、当時流行していた救国の理論「維新変法」の思想を全国に発信すると共に、近代化された諸外国（西洋や日本など）の新聞の紹介も行った。そのため、英語、フランス語、日本語の翻訳者（古城貞吉）が専属されていた。

（9）『農業叢書』第一集第一冊、『東亜学会雑誌』第二編第二号に収録されている「東文学社社章」においては「購求歐西語言文字者實繁有徒、誠務其急也。日本同處一洲、而研習其語言文字者顧寥々焉。彼土人士莅止中國、中國士夫往々不能與之通姓字、彼國書籍流傳中國、中國士夫往々不能通數行。不便孰甚。」と書かれている。

（10）東文学社の日本語講師達は、日本語だけではなく、学識の高い人材であった。羅振玉は、日本から東京帝国大学文科大学漢文科選科卒の藤田豊八と田岡嶺雲を、東文学社の講師として招聘する。自伝で、王国維は「東文学社」で日本人の先生の哲学に関する文集に、カントとショーペンハウアーの哲学の引用を見て喜びを覚えたと語っている。藤田と田岡は自らの文集を教材として用いられた可能性が高い。

（11）その後、彼は羅振玉が創刊した『農学報』に入り、初めての長篇翻訳に挑んだ。それは、池田昇三が口述した『農事会要』である。

（12）王乃誉「王乃誉日記」、「藤田師薦渠翻東報」。

（13）王乃誉、前掲日記、「王国維頌閣薦静安兼充《甬報》日本翻訳、月八元」。

(14) 夏目漱石の一九〇六年に発表した「坊ちゃん」の主人公の卒業した学校は東京物理学校である。
(15) 王国維、「自序」、前掲著作、「昼習英文、夜至物理学校習数学」、一五九頁。
(16) 『東京物理学校五十年小史』、東京物理学校、一九三〇年、三十七頁。
(17) 『東京物理学校五十年小史』、五十三頁。
(18) 田代茂樹『私の履歴書』、日本経済新聞連載、一九七二年十月。
(19) 王国維「自序」、前掲著作、一五九頁。
(20) 中国最初の教育専門誌。一九〇一年五月、羅振玉が上海で発刊し、月二回に刊行され、一九〇八年一月の第一六六号まで続いた。
(21) 海寧市史志辨公室編『王国維乃誉日記』(全五巻)、中華書局、二〇一四年七月。
(22) 楊冰「王国維の哲学美学思想における日本の明治期の哲学心理学思想の影響—桑木厳翼の哲学用語、「正名篇」(荀子)解釈と元良勇次郎の「心物相関論」を中心に」(人文学論集、大阪府立大学人文学学会、二〇一五年三月、一頁〜三四頁。)参考。
(23) 銭鷗「青年時代の王国維と明治学術文化:『教育世界』雑誌をめぐって」、日本ゼロックス小林節太郎『記念基金、一九九七年、一頁〜二七頁。銭鷗氏の指摘した、王国維の翻訳した著作を一七頁から二四頁までを参考。
(24) 楊冰、前掲論文参考。
(25) 「哲学辨惑」における王国維自身の言い方。
(26) 楊冰、前掲論文参考。
(27) 元良勇次郎『倫理学』の「第九章　情緒」に参考、三五頁、一八九三年。
(28) 元良勇次郎『心理学』、金港堂、一八九〇年、三頁。
(29) 元良勇次郎『心理学』、三一頁。
(30) 月與鈴豈有興悲之理乎?唯此物現于主觀的、遂以在心中之悲歸於物耳。謝唯揚、房鑫亮主編、杭州浙江教育出版社、二〇〇九年、三三〇頁。
(31) 元良勇次郎、前掲著作、五一頁。
(32) 「岩間に迸る水の音は天女の樂を奏づるかと訝られ、樹間に囀る鳥の聲い美人の歌を學ぶかと疑いれ、に面白き景色なれども親子に鬱陶として打ち萎れ、鳥の音も花の香も少しも心を慰めず」
(33) 「詞」とは中国における韻文形式の一つである。曲に合わせて詞が書かれたので、詞を埋めるという意味で「填詞」とも呼ばれている。詩(五言律詩、七言律詩、五言絶句、七言絶句など)と異なって長短不揃いの句で構成されることから「長短句」とも呼ばれている。詩は唐の時代で隆盛期を迎えたが、

「詞」はその後の宋の時代で隆盛していた。従って、中国では「唐詩宋詞」の言い方がある。

(34) 葉嘉瑩『王國維及其文學批評』、中華書局、一九九七年、二頁～五頁。

(35) 詞以境界為最上。有境界則自成高格，自有名句。五代、北宋之詞所以獨絶者在此。謝唯揚、房鑫亮主編、杭州浙江教育出版社、二〇〇九年、四六一頁。

(36) 代表的な研究によれば、「境界」は中国古代詩論（厳羽『滄浪詩話』）の延長線にある概念であり、「人間詞話」は中国の伝統的な詩論の集大成と主張しているもの（葉嘉瑩）及び、その反論として「境界」はショーペンハウアーの「直覚説」の応用で、それによって構築された「人間詞話」の全体の理論は中国の伝統詩論を受け継ぐどころかむしろと否定的である、とされている（羅鋼）。

(37) 有有我之境、有無我之境。淚眼問花花不語、亂紅飛過秋千去、可堪孤館閉春寒、杜鵑聲裡斜陽暮、有我之境也。謝唯揚・房鑫亮主編、前掲著作、四六一頁。

(38)「菊采東籬下、悠然南山見」、「寒波潺潺起、白鳥悠悠下」、無我之境也。謝唯揚・房鑫亮主編、前掲著作、四六一頁。

(39) 有我之境、以我觀物、故物皆著我之色彩。無我之境、以物觀物、故不知何者為我、何者為物。古人為詞、寫有我之境者為多、然未始不能寫無我之境、此在豪傑之士能自樹立耳。謝唯揚・房鑫亮主編、前掲著作、四六一頁。

(40) 無我之境、人惟于靜中得之。有我之境、於由動之靜時得之。故一優美、一宏壯也。謝唯揚・房鑫亮主編、前掲著作四六一頁。

(41) 立花銑三郎述『教育学』（東京専門学校邦語文学科第二回一年級講義録）、東京専門学校、刊行年代不詳。

(42) 立花は心理学の観点からリュックの説に従い、人間の精神の発達を三つの境界に分けると語っているが、リュックの説もカントの理性能力の本質によるものである。

(43) 立花銑三郎、前掲著作、五三頁。第三の段階は「幾多の觀念をば精神に同化すべきとすべからずるとを取捨選擇するを要す此の働を思索（シンキング）と云ふ。即ち是れ第三の境界にして是に至りて始て事物の真髄を明知するを得。」